

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24320013

研究課題名(和文)古代東アジア諸国の仏教系変格漢文に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Foundational Research on the Irregular Buddhist Chinese of Ancient East Asian Countries

研究代表者

石井 公成 (ISHII, Kosei)

駒澤大学・仏教学部・教授

研究者番号：10176133

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、変格漢文について研究している日本・韓国・中国の専門家たちが参加し、メールの交換や毎年開催した国際研究集会を通じて研究を推進してきた。その結果、古代の日本と韓国における変格漢文の多様なあり方が明らかになり、『日本書紀』や聖徳太子の作とされる三経義疏には、これまで報告されていた用例よりはるかに多い変格漢文の用例が見られることが知られた。これは、『日本書紀』の各部分の著者たちや三経義疏の著者を判定するうえで、きわめて有益な発見である。さらに、新羅の変格漢文についても様々な発見をすることができ、日本への影響と日本への違いを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Specialists from Japan, Korea and China researching irregular Chinese have participated in the present research, which has propelled research via exchanges by mail, and annually held international research conferences. As a result, the diverse states of irregular Chinese in ancient Japan and Korea have become clear. Many more examples of irregular Chinese than what had previously been reported have been identified in the Nihon shoki, and the Sangyogisho, which is thought to be a work of Prince Shotoku. This has been an extremely useful discovery for the purposes of determining the authors of various parts of the Nihon shoki, as well as the author of the Sangyogisho. Furthermore, various discoveries have been made regarding even the irregular Chinese of Silla, while its influences on and differences with Japan have been clarified.

研究分野：アジア諸国の仏教と関連文化

キーワード：和習 倭習 三経義疏 日本書紀 華嚴経問答 智雲

### 1. 研究開始当初の背景

(1)変格漢文については、ある程度研究がなされていた。「憲法十七条」を含む『日本書紀』の変格語法を多数指摘して整理し、区分論を明確に打ち立てた『日本書紀の謎を解く』によってこの分野を画期的に発展させた中国語学の森博達、『漢文と東アジア 訓読の文化圏』によって日本以外の変格漢文を指摘した中国文学の金文京、『風土記』その他に見られる仏教漢文その他の特異な語法を指摘していた国語学の瀬間正之、森にならって三経義疏などの変格漢文を仏教学の立場から検討していた石井公成などが取り組んでいたため。しかし、分野の違いもあって、これら諸分野の研究者が共同で研究する機会はなく、また韓国や中国の関連分野の研究者との共同研究の場も無かった。

(2)そこで、そうした共同研究の必要性が痛感されるようになった。韓国・日本の変格漢文、とりわけ『日本書紀』と三経義疏の変格漢文は仏教漢文と関係深いことから、石井が研究代表者となり、上記の研究者に加えて諸国・諸分野の研究者による共同研究を開始することと意見が一致し、科研費による研究を始めることとなった。韓国からは、新羅独特の漢文読法の専門家であった韓国語学の鄭在永、変格漢文に興味を持っていた韓国仏教史の崔鉉植、中国からは円仁の『入唐求法巡礼行記』に見える変格語法に関する研究で知られる中国語学の董志翹に研究協力を依頼した。また、日本からは中国撰・韓国撰で議論のある仏教文献について検討していた奥野光賢、コンピュータ処理を得意とする仏教学の師茂樹が加わり、様々な面から研究を進めることとなった。

### 2. 研究の目的

(1)日本・韓国・中国の様々な分野において変格漢文の研究をしている代表的な研究者たちが協力し、仏教漢文とそれに基づく変格漢文に注意しつつ共同研究を行うことにより、研究を大幅に推進し、日本・韓国などの変格漢文の特色を明らかにする。最終的には、著者をめぐる論争が続いている諸文献、つまり、「憲法十七条」を含む『日本書紀』の各部分に見られる変格漢文の特徴、同様に著者論義が盛んな三経義疏の文体の分析を進め、その特徴と著者を明らかにする。

(2)中国僧の著作とされているものの中には、実際には新羅僧が書いた文献であったり、中国僧の著作を新羅や日本の僧が編纂し、僅かながら自分で補足を加えたりしたものがあることが知られている。そこで、変格漢文の研究を進めることにより、これまで知られていないそうした文献を発見するよう努める。

### 3. 研究の方法

(1)研究代表者、研究分担者、海外協力者たちの間でメールをやりとりし、また著書・論文抜刷などを交換して情報共有に努めるほ

か、国内での研究会、および国際研究会を開催し、そこで発表と質疑をおこなうことにより、情報共有と研究方法の改善を進めた。研究にあたっては、N-gram に基づく NGSM システムを用いたコンピュータ処理を活用することにより、客観性を高めるよう留意した。(2)関連する研究書や論文を集めた参考文献のデータベース、またこれまでの関連する諸論文などから変格漢文の用例を抜き出して用例データベースの作成に取り組んだ。

### 4. 研究成果

(1)(1)初年度は、研究会1回、国際研究会を2回開催した。変格漢文を研究している日本・韓国・中国の代表的な研究者たちが参集し、発表・質疑・討議をおこなったのは、これが初めてのことで、これによって諸分野の研究状況が分かり、研究が大幅に進んだ。特に重要だったのは、中国の古典漢文とは異なる漢訳仏教特有の表現と、そうした表現に基づいて仏教の盛んな新羅や日本で生まれた変格な語法の違いが明確になったことだろう。

また、古代韓国の変格漢文の研究については、韓国では韓国語学や古代韓国史などの研究者が中心となってきたため、金石文や木簡など限られた資料に見える用例だけが注意されてきたが、新羅仏教文献に変格語法が数多く見られることが知られたため、その研究が大幅に進んだ。

一方、見慣れない表現でも、時代や地方や文献の性格によっては用いられる場合があるため、変格な語法であるかどうかは、慎重で幅広い用例調査に基づかなければならないことが再確認され、研究の精度が増した。

(2)以後も国際研究会を開催した。二年目からは『万葉集』その他の日本古代文献に見える和習の専門家である中国の馬駿(当時は、北京の對外経済貿易大学教授)が協力者として加わり、その結果、和習と言われる変格語法と仏教漢文の語法との関係の深さがより明らかになった。馬駿は、平成14年度は東京経済大学の交換教授として来日し、研究代表者の大学院演習に参加するようになったため、変格漢文に関する共同研究がいっそう進むようになった。

(3)研究代表者、研究分担者、海外の研究協力者の共同研究により、変格漢文の研究が進んだ結果、従来のように資料の文章の内容にばかり目を向けるのは不十分であって、言い方にも注意しなければならないという研究意識が国内の自覚的な研究者の間に芽生えつつある。個別の成果としては、真偽論争が盛んであって史学界では中国撰述説が有力であった三経義疏は、いずれも変格語法で満ちており、しかもどの文献も語法がきわめて似ていることが明らかになった。つまり中国人ではない同じ人(たち)が書いたか、そうした人と、その文体になじんでいて区別できないような変格語法で書く弟子などが書いた

た可能性が高いことが判明した。これは通説となりつつある。

また、韓国では、中国僧と思われてきた経歴不明の僧侶の文体に注意し、語法の面から新羅・百濟・高句麗の僧である可能性を探ろうとする動向が強まってきた。本研究でも、代表者が唐の僧と伝えられてきた天台宗の智雲は新羅僧の可能性があることを提示し、関心を呼んでいる。

(4)その文献が変格漢文であるかどうかを自動的に判定するプログラムの開発にまでは至らなかったが、本研究を推進していく過程で変格漢文の多くの用例が発見されたため、これらを整理して公開し、他の研究者に役立ててもらおう予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16 件)

石井 公成、唐の石鼓寺の智雲は新羅僧か(一) - 『妙経文句私志記』『妙経文句私志諸品要義』の変格漢文 -、駒澤大学仏教学部紀要 75 号、査読無し、2017、25-36

瀬間 正之、『古事記』の接続詞「余」はどこから来たか、日本研究 17 輯、査読無し、韓国・釜山大学校日本研究所、2016、7-28

崔 鈞植、新羅 變格漢文(新羅の変格漢文) (木簡と文字) 17 号、査読有り、2016、39-59

崔 鈞植、新羅漢文資料 ‘爾’ 變格用法(新羅漢文資料に見られる‘爾’の変格用法)、口訣学会学術大会発表論文集、査読無し、2016、27-38

石井 公成、『日本書紀』における仏教漢文の表現と変格語法(上)、駒澤大学仏教学部研究紀要 73 号、査読無し、2015、216-204

森 博達、復元音で読む古典 卑弥呼から徒然草まで、『日本語学』34(10)、査読無し、2015、2-9

金 文京、《萍遇録》 - 18 世紀末朝鮮通信使与日本文人の筆談記録、東亞漢詩文交流唱酬研究、中国・中西書局、査読無し、2015

瀬間 正之、文字言語から見た中央と地方 - 大宝律令以前 -、文学・語学 212 号、査読無し、2015、50-62

瀬間 正之、上代日本敬語表記の諸相 - 「見」「賜」「奉仕」「仕奉」 -、上智大学国文学科紀要 32 号、査読無し、2015、135-159

崔 鈞植、『華嚴經問答』 變格漢文

(『華嚴經問答』の変格漢文に対する検討)、口訣研究 35、査読有り、2015、29-42

馬 駿、『風土記』の文体と漢訳仏典の比較研究 四字語句と句式を中心に、仏教文学研究 18 号、査読無し、2015、47-63

石井 公成、三経義疏の共通表現と変則語法(下)、奥田聖應先生頌寿記念論集刊行会編『奥田聖應先生頌寿記念 インド学仏教学論集』、佼正出版社、査読無し、2014、982-994

森 博達、皇祖天照大神はいつ誕生したか 『日本書紀』区分論から史実を探る、京都産業大学日本文化研究所紀要 19、2014、196-221、

金 文京、書評：陳培豊『日本統治と植民地漢文』(三元社 2012)、歴史学研究 917 号、査読無し、2014、54-57

森 博達、文字表現から見た『日本書紀』の成り立ち、上代文学 110 号、査読無し、2013、16-30

馬 駿、『懷風藻』詩歌人名対<和習>表達价值探佚、日本文学研究：多元視点与理論深化、青島出版社、査読無し、2012、224-235

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 1 件)

石井 公成、春秋社、聖徳太子 実像と伝説の間、2016、257

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

石井 公成 (ISHII, Kosei)  
駒澤大学・仏教学部・教授  
研究者番号：10176132

(2)研究分担者

森 博達 (MORI, Hiromichi)  
京都産業大学・外国語学部・教授  
研究者番号：90131292

金 文京 (KIN, Bunkyo)  
鶴見大学・文学部・教授  
研究者番号：60127074

瀬間 正之 (SEMA, Masayuki)  
上智大学・文学部・教授  
研究者番号：00187866

奥野 光賢 (OKUNO Mitsuyoshi)  
駒澤大学・仏教学部・教授  
研究者番号：40279667

師 茂樹 (MORO Shigeki)  
花園大学・文学部・教授  
研究者番号：70351294

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

董 志翹 (DONG Qiqiao)  
中国・南京師範大学・文学院・教授

鄭 在永 (JEONG Jae Yong)  
韓国・韓国技術教育大学校・教養学部・  
教授

崔 鈞植 (CHOE Yeon Shik)  
韓国・東国大学校・文科大学・教授

馬 駿 (MA Jun)  
中国・北京第二外国語大学・日本語学院・  
教授